

シリーズ 英文法を解き明かす
現代英語の文法と語法

1

内田聖二／八木克正／安井泉 編

中山仁

ことばの基礎 1

名詞と代名詞

研究社

編者はしがき

シリーズ「英文法を解き明かす——現代英語の文法と語法」は、英語語法文法学会が2012年に設立20周年を迎えたのを期に、学会で培われてきた活動成果を広く社会に還元すべく、出版を企画したものです。

英語語法文法学会は、28名の研究者による設立趣意書を受け、1993年に初代会長小西友七のもと設立されました。その背景には、英語学、言語学の分野において、変形生成文法をはじめとする言語理論の隆盛によって学問的な関心が理論的側面に偏り、研究対象が文法の実証的記述から離れていったことがあります。各種学会での研究発表、シンポジウムが理論的な研究に傾き、個別言語としての英語の記述的な語法研究が正しく評価されない状況にありました。

教育の現場で英語を教え、また英語のあるがままの姿を正しく理解しようと思っている研究者にとって、英語の語彙や構文の特性などの基本的な成り立ちをつまびらかにして、英語自体の理解を深めることこそが、基本的な出発点だと思います。ことばの多様性とそれを説明する筋の通った記述という地道な研究の成果を発表する場を保証することが、本学会の使命のひとつだと思います。

1993年11月、第1回大会が立命館大学で開催され、その後、設立の趣旨を実現すべく、さまざまな取り組みがなされてきました。年次大会ではシンポジウム、研究発表のほか、第6回大会からは特色ある「語法ワークショップ」をはじめました。機関誌の『英語語法文法研究』は創刊号(1994年)から毎年刊行され、前年のシンポジウムに基づく論考、応募論文、語法ノートに掲載しています。また、小西友七初代会長の寄付金を基金として、2000年に「英語語法文法学会賞」を、2010年からは若手研究者の育成と研究活動の促進を目的とした「英語語法文法学会奨励賞」を、新設しました。さらに、2005年以降、学会の社会貢献の一環として会員以外の方も参

加できる英語語法文法セミナーを毎年8月大阪で開催しています。これは、英語学・言語学の最先端の学識に触れる機会を広く提供することを目的としたものです。

このシリーズは、「ことばの基礎」「談話のことば」「ことばを彩る」「ことばとスコープ」「ことばの実際」という5つの視座から英語ということばを見つめるものです。「ことばの基礎」ではものの名付け、代替表現などを対象として、名詞と代名詞を第1巻でとりあげ、第2巻では文構造の基本としての動詞を記述の中心に据えます。「談話のことば」では、品詞を超えて文をつなぐ現象を第3巻で扱い、談話と文法的規範からの逸脱との関係を第4巻で考察します。「ことばを彩る」というテーマでは、第5巻でテンス・アスペクト、第6巻ではムード、の観点から英語表現のニュアンスの違いを論じます。第7巻と第8巻は「ことばとスコープ」にあてられ、それぞれ照応表現、否定表現が分析の対象となります。「ことばの実際」では、話しことばの実相を第9巻で提示し、英文法と言語コーパスとの接点を第10巻で記述、説明します。

本シリーズは、英語の文法事象と語法を、最新の知見からわかりやすく解説するとともに、その研究成果を英語教育の現場で役立つ情報として盛り込むことで、研究と教育の両面から包括的に、発話者の「心」を伝える英語表現の仕組みを解き明かすことを目指すものです。

2016年3月

編者

内田 聖二
八木 克正
安井 泉

はしがき

本書は、名詞と代名詞の語法と文法について、網羅的に解説したのではなく、その本質に迫るトピックに絞って論じたものである。第1章は名詞を、第2章は代名詞を取り上げ、全体として2章構成となっている。

第1章の冒頭では、名詞と名詞句の考え方について取り上げた。伝統文法的な立場に基づく「名詞」の概念と、生成文法的な立場に立つ「名詞句」の概念を正しく理解することが、名詞と代名詞の理解に不可欠であると考えたからである。教育の現場では、名詞という用語は使用されていても、名詞句という用語、特に生成文法的な立場で用いる名詞句はそれほど定着していないと思われる。そのような中で、名詞の問題をさらに深く学ぼうとして生成文法に基づく専門書に手を伸ばした際、名詞と名詞句の区別に戸惑うこともあるかもしれない。その違いの本質を丁寧に説明することによって、敷居をできる限り低くし、名詞・代名詞の理解に避けて通れないこの2つの概念をはっきりと区別できるようにした。これによって、英語を母語とする話者がことばを用いて世の中をどのように切り取っているのかがずっとわかりやすくなると思われる。名詞と名詞句の概念を通して伝統文法と生成文法の立場の違いを踏まえれば、名詞と代名詞、ひいては英文法の理解がさらに進むと同時に、教壇においても納得のいく英文法の解説ができると考えている。

英語の数と格は日本語にない文法範疇であるので、日本人が英語を話すとき、冠詞の使用と平行して意識的に関わらなくてはならない項目となる。言い換えれば、英語の数と格は英語話者の心の中をのぞき込み、彼らの「ものの見方」を理解するための格好の題材となるのである。本書では、豊富な実例を用いて名詞の用法の比較、分類、傾向分析などを行い、全体的な使用の実態および類似する用法間の連続的な関係がわかるような記述を試みた。

名詞との関わりでは冠詞の用法も重要ではあるが、冠詞についてもまた、網羅的な記述を目指すのではなく、英語話者の心の動きを表出しているいくつかの特別な用法を取り上げた。具体的には、総称的用法における冠詞の語法に焦点を絞った。このような特別な意味を知ることによって、冠詞の基本的な意味が浮き彫りにされ、冠詞の全体的な理解につながるものと考えている。

第2章では、代名詞の語法のうち、人称代名詞・不定代名詞・疑問代名詞・関係代名詞に関わる個別的問題を取り上げることにした。人称代名詞については、人称・数・格・性に関わる様々な語法上の問題を含んでいるので、特に詳しく論ずることにした。人称は話し手を基準とし、発話場面との関連によって、その代名詞によって指し示される意味が変容する特徴をもっている。したがって、会話ごとに話し手と聞き手の関係や発話場面を見極めなくてはならない。特定の人称を介して別の人称を指すこともあるので、文の構造と語の意味を理解していても、適切なコミュニケーションが成立するとは限らない。このような問題においては、話し手の意図・発話場面・文脈などを考慮に入れて発話解釈の枠組みを探究する語用論(pragmatics)の視点が重要となってくる。

不定代名詞については one を取り上げた。one の理解には、本書の冒頭でこだわった名詞と名詞句との区別が、重要な関わりをもってくる。

疑問代名詞と関係代名詞については、取り上げる例はそれぞれ異なるものの、ある種のあいまい性が生じる問題を含むという共通点があることを示した。このことは、代名詞の指示対象に向けられた話し手の意識のあり方に注目する必要があることを意味する。問題として取り上げた例は、単にあいまい性を示しているのではなく、一定の要因の影響によって連続的な関係を表出していると見る例となる。

全体を通して、名詞と代名詞の語法と文法は決して無味乾燥な事項の羅列ではなく、英語話者のものの見方・考え方、心の動きを垣間見ることのできる興味深い示唆の宝庫であると言えることができる。名詞または代名詞について疑問が生じたとき、あるいは、教室で生徒や学生からの質問を受けることがあったとき、話者の心の動きと一体になって脈を打っている英

語の感覚や、ことばのエネルギーを感じるような答えを得ることができる文法書として、また、各種の具体例や解説をさらに深く掘り下げて、新事実の発見や一般化に結びつけるための資料として本書を活用してもらえればありがたい。

文法事項の確認には、主に Jespersen の *A Modern English Grammar on Historical Principles* (1909–49), Quirk et al. (1985), Huddleston and Pullum (2002), Swan (2005), Hewings (2013) を参考とした。特に Jespersen をはじめとする伝統文法の知見はいまだに色あせることなく、立場の違いにかかわらず今後の語法と文法の研究においても重要な存在であり続けることであろう。この認識は執筆を通して思いがけず得られた貴重な経験でもある。

実例の検索には、主に COCA (The Corpus of Contemporary American English; 約 5 億 2,000 万語; 1990–2015) と BYU-BNC (British National Corpus; 約 1 億語; 1980s–1993) の 2 つのコーパスを活用した。いずれも Mark Davies 氏 (Brigham Young University) の公開によるものである (<http://corpus.byu.edu/>)。

本書を刊行するにあたり、編者として貴重な執筆の機会を与えてくださった内田聖二先生、八木克正先生、安井泉先生に心から感謝申し上げます。特に、安井泉先生には構想の段階から度々面会の機会をいただき、執筆の心得も含めて具体的かつ詳細なご意見をいただいた。多忙きわめる中でも隅々まで原稿に目を通され、一つひとつの言語事実から説明の一貫性に至るまで問題点を見逃すことなくご指摘いただいた。また、筆者に原稿を返送される際、内容のコメントとともにその時々の筆者の心境や執筆状況に配慮して添えられたことばが何よりの励みとなり、頓挫することなく最後まで意欲を持って書き上げることができた。これらのご指導と細やかな心遣いなくして本書の完成はありえなかった。また、筆者の同僚である Paul Martin 氏には校務多忙な折にも貴重な時間を割き、労をいとわず誠意を持って英語母語話者としてのコメントを多数提供していただいた。御礼を申し上げます。なお、本書の内容に関する責任はすべて筆者に帰するものである。

執筆当初より、吉良文孝氏と大竹芳夫氏から度々いただいたご意見は筆者にとって大きな刺激であり、励ましでもあった。記して感謝する次第で

ある。

研究社出版部の津田正氏、松本千晶氏には厳しいスケジュールにもかかわらず筆者の意向を最優先し、辛抱強く原稿の完成を待ってくださった。さらに、校正から出版まで終始的確かつ速やかな対応によって、校了までゆとりをもって臨めるようご配慮いただいた。心から御礼申し上げたい。

2016年7月

中山 仁

※本書 2.5 節は JSPS 科研費 24520548 「英語の関係詞節の接続形式と発話解釈に関する意味的・語用論的研究」の助成を受けています。

編者はしがき iii

はしがき v

第1章 名詞 1

- 1.1 名詞と名詞句 1
 - 1.1.1 名詞句とは(1)——伝統的な見方 1
 - 1.1.2 名詞句とは(2)——生成文法などの見方 3
 - 1.1.3 my goal も he も John も名詞句——本書の立場 4
 - 1.1.4 名詞句の定義 6
 - 1.1.5 ものを指し示すのは名詞ではなく名詞句 6
- 1.2 名詞の分類——英語話者はものをどう「みなす」のか 7
 - 1.2.1 学校文法における名詞の分類と注意点 7
 - 1.2.2 名詞の体系的な分類 9
 - 1.2.3 可算と不可算(1)——現実世界との違い 11
 - 1.2.4 可算と不可算(2)——言語間で異なるということ 12
 - 1.2.5 可算と不可算(3)——可算名詞は「数えられる」のか 12
 - 1.2.6 可算と不可算(4)——常に複数形の名詞 16
 - 1.2.7 a paper と paper——可算と不可算で意味の使い分け 17
 - 1.2.8 drink coffee, order two coffees, etc.——レストランで 18
 - 1.2.9 a good job と hard work——類義語で可算と不可算の使い分け 19
 - 1.2.10 形容詞が付いても a(n)の付かない抽象名詞 21
- 1.3 集合名詞——単複両扱いになる名詞 22
 - 1.3.1 集合名詞と数の一致 23
 - 1.3.2 集合名詞のメンバーの数え方 27
 - 1.3.3 bacteria, data, media 28
 - 1.3.4 team とチーム名で異なる単複の扱い 30
 - 1.3.5 その他の固有名詞 35
- 1.4 ある目的・場面で用いられる異成分の集合——baggage, clothing, furniture, etc. 37
- 1.5 常に複数形で用いられる名詞 40
 - 1.5.1 2つの部分がつながってひと組になっている衣服や道具——trousers, scissors, glasses, etc. 40
 - 1.5.2 様々な形や性質のものから成る集合——arms, clothes, contents, etc. 43
 - 1.5.3 漠然と複数のまとまりを表すタイプ、1つのものや場所を指すタイプ——beginnings, earnings, mountains, etc. 45
- 1.6 複数形の語尾を持たないが常に複数扱いの名詞——cattle, people, police, etc. 49
- 1.7 語尾が -ics の名詞は単数扱いと複数扱いで使い分け——politics, statistics, economics, etc. 50
- 1.8 語尾が -s でも単数扱いの名詞——measles, billiards, crossroads, etc. (絶対複数の不可算名詞と単複同名名詞) 52
- 1.9 集合的な名詞と絶対複数の分類 55
- 1.10 主語と動詞の数の一致 59

- 1.10.1 文法上の一致、意味上の一致、近接性による一致 62
- 1.10.2 Type A・Type B: 主要部の名詞で決まる——数の一致の原則 65
- 1.10.3 Type B: 気になる名詞の語法(1)——group(a [the] group と a group of X (複数)) 68
- 1.10.4 Type B: 気になる名詞の語法(2)——couple(a couple と a couple of X(複数)) 72
- 1.10.5 Type B: 気になる名詞の語法(3)——pair(a [this] pair と a pair of X(複数)) 73
- 1.10.6 Type B: 気になる名詞の語法(4)——bunch(a [the] bunch と a bunch of X (複数)) 76
- 1.10.7 Type C: 名詞句の意味に呼応(1)——数量の表現(表2: 用例⑤) 78
- 1.10.8 Type C: 名詞句の意味に呼応(2)——掛け算は Type C か Type A か? 80
- 1.10.9 Type C: 名詞句の意味に呼応(3)——any [each, neither, none] of X の複数呼応と Type D(近接性による一致)の関係(表2: 用例⑥, ⑦) 82
- 1.10.10 Type C: 名詞句の意味に呼応(4)——A as well as B の複数呼応と Type D (近接性による一致)の関係 84
- 1.10.11 Type D: 割合の表現と近接性(1)——about 50% [half] of the houses など(表2: 用例⑧, ⑨) 85
- 1.10.12 Type D: 割合の表現と近接性(2)——one in five people は Type D か Type A・B(数の一致の原則に従う)か? 87
- 1.10.13 Type D: more than a [one] X, many a X の単数呼応 90
- 1.10.14 Type E・Type F: A and B の論理上の一致・意味上の一致Ⅱ(表2: 用例⑩~⑬) 91
- 1.10.15 Type G: A and B の近接性による一致(および意味上の一致Ⅱの関与)——a year and a half(表2: 用例⑭) 94
- 1.10.16 Type E~Type G 補足: 一見 A and B に見える表現の数の一致——A, and +副詞+B 96
- 1.10.17 Type H・Type I: A or B の論理上の一致・近接性による一致(表2: 用例⑮, ⑯) 96
- 1.10.18 Type J: A or [nor] B の意味上の一致Ⅱ(1)——主語全体の意味に呼応(表2: 用例⑰, ⑱) 97
- 1.10.19 Type K: A or [nor] B の意味上の一致Ⅱ(2)——a day or two の単数呼応(表2: 用例⑲) 100
- 1.10.20 Type L: not only A but also B; not A but B の近接性による一致(表2: 用例⑳) 100
- 1.10.21 その他の主語と動詞の数の一致(1)——there 構文 103
- 1.10.22 その他の主語と動詞の数の一致(2)——one of X that[who]+動詞 104
- 1.11 who や what と動詞の呼応——Who was at the party? / What we need most is [are] books. 106
- 1.12 主語と補語の数の関係——*My favorite fruit is apples.* 111
- 1.13 配分複数と配分単数——*The students raised their hands [hand].* 115
- 1.14 気になる名詞の単複とその用法 118
- 1.14.1 *this kind of thing* と *these kind(s) of things*——kind of を用いた類義表現の語法 118
- 1.14.2 *chopped onion(s), mashed potato(es), etc.* の可算・不可算 125

1.15	いわゆる総称的用法について	128
1.15.1	定・不定による区別と指示的意味(reference)に基づく区別	128
1.15.2	総称的指示を持つ名詞句——概要	132
1.15.3	the+可算名詞単数形—— <i>The lion is a fierce animal.</i>	135
1.15.4	a(n)+可算名詞単数形—— <i>A lion is a fierce animal.</i>	138
1.15.5	φ+可算名詞複数形—— <i>Lions are fierce animals.</i>	139
1.15.6	φ+不可算名詞—— <i>Fruit is good for you.</i>	140
1.15.7	単に種を指示する名詞句—— <i>Do you play the guitar?</i>	141
1.15.8	国民・民族を表す名詞句—— <i>an American; (the) Americans</i>	146
1.16	所有格	149
1.16.1	所有格の位置と冠詞の関係——なぜ * <i>a Tom's friend, *the Tom's friend, *the friend of Tom's</i> は誤りか	150
1.16.2	<i>Tom's friend</i> が定名詞句として用いられない例	154
1.16.3	所有格は名詞句	155
1.16.4	所有格表現が使用されやすい例—— <i>Tom's computer</i>	157
1.16.5	of句表現が使用されやすい例—— <i>the name of the book</i>	163
1.16.6	所有格表現(X's Y)におけるXとYの意味関係——名詞の意味と文脈	166
1.16.7	種類・性質を表す所有格—— <i>a women's college</i>	168
1.16.8	時間・価値を表す所有格—— <i>two weeks' vacation, millions of dollars' worth of diamonds</i>	169
1.16.9	<i>a friend of Tom's</i> とその関連表現(1)——概要	174
1.16.10	<i>a friend of Tom's</i> とその関連表現(2)—— <i>a friend of mine</i> ('s所有格と所有代名詞との比較) (cf.(210a))	176
1.16.11	<i>a friend of Tom's</i> とその関連表現(3)—— <i>a friend of Tom</i> ('s所有格と'sなし名詞句との比較) (cf.(210b))	177
1.16.12	<i>a friend of Tom's [mine]</i> とその関連表現(4)—— <i>one of Tom's [my] friends</i> (cf.(210c))	180
1.16.13	<i>a friend of Tom's [mine]</i> とその関連表現(5)—— <i>Tom's [my] friend</i> (cf.(210d))	186
1.16.14	場所の属格: 単独で場所を表す所有格—— <i>She's staying at her mother's.</i>	187

第2章 代名詞

191

2.1	はじめに	191
2.2	人称代名詞	192
2.2.1	「男性または女性」の単数名詞句を受ける <i>they</i>	192
2.2.2	主格と目的格——目的格は文中のどこに生じるか	199
2.2.3	<i>we</i> と人称—— <i>we</i> は誰を指すのか	203
2.2.4	<i>we</i> の特別用法——文字通りの意味からのずれ	204
2.2.5	総称用法の人称代名詞—— <i>we, you, they</i>	213
2.2.6	総称の <i>you</i> の応用—— <i>you</i> が話し手自身を指す場合	216
2.3	<i>one</i> の用法——数詞と不定代名詞	221
2.3.1	<i>one</i> の分類	221
2.3.2	数詞(名詞的用法)の <i>one</i>	222
2.3.3	名詞句(NP)の代用形 <i>one</i> ——単独で「a(n)+名詞」を代用	223

2.3.4	名詞(N)の代用形 <i>one</i> ——修飾語句とともに用いる可算名詞	225
2.3.5	気になる代用語 <i>one</i> の用法(1)—— <i>one of the many Americans</i> か <i>one of many Americans</i> か	230
2.3.6	気になる代用語 <i>one</i> の用法(2)—— <i>It takes one to know one.</i>	233
2.4	疑問代名詞—— <i>which</i> と <i>who/what</i> の交代	234
2.5	関係代名詞	239
2.5.1	制限用法と非制限用法——基本的特徴と相違点	240
2.5.2	制限節と非制限節の区別があいまいになる関係詞節	242
2.5.3	制限的な非制限節(1)——伝達上の重要度が高い場合	244
2.5.4	制限的な非制限節(2)——予測可能性が高い場合	246
2.5.5	独立文となった非制限節——予測可能性の低い事例	250
2.5.6	ま と め——関係詞節の連続性	252
	参考文献	255
	索引	259

Column

weather の特異性	20
メタファー・メトニミー・シネクドキ	34
baggage と luggage の違い	39
数と単位の単数・複数	95
as sure as eggs is eggs と数の一致	114
play the [a, φ] piano の語法	144
決定詞	149
-s'にするか -s'にするか? ——綴りが s で終わる名詞の所有格(ladies', Jones ('s), Jesus', etc.)と発音	156
a painting of my sister's と a painting of my sister	179

第 1 章

名 詞

1.1 名詞と名詞句

1.1.1 名詞句とは(1)——伝統的な見方

名詞(noun)とは、もの・人の名前などを表す語である。現代英語の場合、形態的には複数形語尾が付いたり、's が付いて所有格になったりする。では、名詞句(noun phrase)とは何であろうか。これには2つの異なる見方があり、その見方によって使い方も異なる。

1つは伝統的な見方で、名詞句は「形態上は名詞ではないが、名詞と同じ働きをする句」を指す。「名詞と同じ働き」とは、文中で主語・目的語・補語になるということである。日本の高校生向け英文法学習書の多くはこの意味で名詞句を用いる。例えば、(1a)の *to see you again*, (1b)の *thinking about the stranger*, (1c)の *to win the championship* は「名詞句」である。

- (1) a. It's nice [名詞句 *to see you again*].
(また会えてうれしいです)
- b. I can't stop [名詞句 *thinking about the stranger*].
(あの見知らぬ人のことが気になって仕方がない)
- c. My goal is [名詞句 *to win the championship*].
(私の目標は優勝することです)

これらは動詞を中心語とした句(phrase)なので、形態上は名詞ではない。しかし、文中ではそれぞれ主語、目的語、補語となっているので、語であ

る名詞と同じ働きをしているとみなされる。このように、「名詞」という品詞が語の意味・形態だけでなく句の機能にも当てはまる点が伝統的な見方の特徴である。

この見方に従うと、例えば *My goal is to win the championship.* (= (1c)) の *my goal* は句の形をしていて名詞と同じ働きをしているが、「名詞句」とは言わない。あえて言えば「修飾語の付いた名詞」である。*my goal* の中心語は名詞(*goal*)なので、修飾語が付いても意味上も機能上も名詞に変わりはない。そうであれば、あえて名詞句という用語を用いて語と句を区別する必要がないというのが伝統文法の考え方である。これは他の品詞についても同様で、例えば *very nice* は *nice* を中心語とする形容詞なので、*nice* であろうが *very nice* であろうが機能上の違いはなく、*very nice* をわざわざ形容詞句とは言わない。これに対し、*My goal is to win the championship.* の *to win the championship* の場合、それを構成する個々の語の機能と句全体の機能は異なる。この句は動詞や名詞などで構成されてはいるが、文中で補語(名詞)の役割を果たすのは *to win the championship* 全体である。その点で句の機能上の自立性が認められるので、この句は文法上意味のある存在とみなされる。そのため、*to win the championship* のような句を *my goal* などと区別して「名詞句」と呼ぶのである。他の品詞についても同様で、*a house across the street* (通りの向かいの家) の *across the street* は前置詞、冠詞、名詞の3つの語から成るが、句全体としては *a house* を修飾する形容詞の役割を果たすので「形容詞句」と呼ぶ。このように、機能上自立的な句についてのみ「名詞句」「形容詞句」などの用語をあてる。

単語の名詞であれ修飾語の付いた名詞であれ、区別せずに「名詞」とみなすのが伝統文法やそれに沿った日本の高校生向け英文法学習書の見方なので、「名詞は主語・目的語・補語になる」という説明をする際、名詞に修飾語が付いているかどうかは問わないことになる。例えば、*An apple a day keeps the doctor away.* (毎日1個のリンゴで医者いらず) という文の主語は何かと問われれば、「名詞の *apple*」と答えようが「名詞の *an apple a day*」と答えようが大差ないというのが多くの英文法学習書の見方である。言い換えれば、「主語」も実際のところ「語」である必要はなく、句の形をしてい

でも用語上は同じ「主語」を使う。一部の英文法学習書ではこの例の *an apple a day* を「主語」、*apple* を「主語」と分けて説明することもあるが、実際には当の学習書の中でも用語の使い方があいまいになることがある(特に「主語と動詞の数の一致」や「主語と動詞の倒置」の説明では「主語」を「主部」の意味で用いることが多い)。このあいまいさが残る原因は、当の学習書が全体として伝統的な見方をとる一方で、伝統的にはあまり意味のないとされた句の内部構造にも言及しようとしているところにある。結局、英文法学習書においては「名詞」「主語・目的語・補語」と言う場合、厳密に言えば単語としての名詞を指すが、実質的には修飾語を含めたひとまとまりの句を指しているのだと理解しておく必要がある。

1.1.2 名詞句とは(2)——生成文法などの見方

伝統文法では句の自立的な機能に注目して名詞句という用語を用いるが、生成文法などでは句の内部構造に注目した用語として名詞句を用いる。すなわち、名詞句とは「名詞を中心語とし、主語・目的語・補語などとして機能する句」である(「名詞を中心語とする」という句の構造上の特徴を内心構造的(endocentric)と言う)。例えば *My goal is to win the championship.* (= (1c)) なら、名詞句は *to win the championship* ではなく、*my goal* と *the championship* である。*my goal* と *the championship* はそれぞれ名詞 *goal* と *championship* を中心語としてひとまとまりの句を形成している¹。

前節で見た通り、伝統文法ではこのような句を文法上あまり意味がないと考えた。しかし、生成文法などでは、文と句はすべてこのような句の集合によって成立することを前提とし、句の内部で使われる語句とそれらの関係(先行関係や支配関係など)に注目する。したがって、句が自立的に名詞や形容詞などの機能を持つかどうかという点は問わない。なお、生成文法ではあらかじめ「主語・目的語・補語は名詞句」と規定する。言い換えれば、主語・目的語・補語は「語」ではなく初めから「句」なのである。名

¹ 伝統文法で名詞句とされていた (1a) の *to see you again*, (1b) の *thinking about the stranger*, (1c) の *to win the championship* などは、別の範疇(意味上の主語を持つ抽象的な句)となる。

詞句は noun phrase の頭文字を取って NP と表記されることもある(単数で不定冠詞が付く場合は an NP; 複数の場合は NPs)。

生成文法では主語・目的語・補語が名詞句と規定されるので、それぞれの要素が1語であっても名詞句とみなされる。例えば、Haste makes waste. (せいては事をし損じる)という文であれば、主語 haste と目的語 waste はともに名詞句である。もちろん、単なる語彙としてならば名詞である。名詞(N)と名詞句(NP)の構造上の関係を(2)に示す。

(2) $[_{NP(主語)} [_N \text{Haste}]] \text{ makes } [_{NP(目的語)} [_N \text{waste}]]$.

また、代名詞も文中では名詞句とみなされる。なぜなら、代名詞は(一部を除き)名詞ではなく「名詞句の代用」として使われるからである。例えば、(3a)の he, she はそれぞれ名詞句 the man, the little Swedish girl の代用、(3b)の it は名詞句 an excellent museum の代用である²。

(3) a. The man invited the little Swedish girl because he liked her.

(Quirk et al. 1985: 76)

(男性はそのスウェーデン人の少女のことが好きなので招待した)

b. We have an excellent museum here. Would you like to visit it?

(Ibid.: 347)

(ここには素晴らしい博物館があります。行ってみたいですか)

同様に、固有名詞も名詞句と平行的な関係を持つので(例えば *My brother is a doctor.* と *John is a doctor.* との平行性)、語彙としては名詞だが文中では名詞句として機能している。

1.1.3 my goal も he も John も名詞句——本書の立場

本書では名詞句という用語を生成文法などの立場に沿って使用すること

² 代名詞 one は名詞句の代用をする場合と、以下のように名詞の代用をする場合がある: John searched the big room and then the small one. (Quirk et al. 1985: 75) (John は大部屋の中を捜した後、小部屋の中を捜した)。詳しくは 2.3 を参照。

にする。本書があえて従来の英文法学習書と異なる見方をするのは、第1に、生成文法で言うところの名詞句を用いることによって、伝統的な見方で問題になる「名詞」と「修飾語の付いた名詞」のあいまいさが解消されるからである。「修飾語の付いた名詞」は「名詞句」として区別され、主語・目的語・補語は名詞句で統一される。代名詞(he など)や固有名詞(John など)も名詞句となるので説明上の一貫性が保たれる。

第2に、生成文法的に名詞と名詞句を区別すれば、統語上・意味上の問題を説明するのに都合がよい。例えば、主語と動詞の数の一致は、名詞句と動詞の数の一致ということになる。動詞の呼応の仕方は主語によって実に様々であるが、これを名詞句の構造と意味に基づいて整理すれば主語と動詞の数の一致のタイプやタイプ同士の関係をより明確に示すことができる。Neither of them is [are] welcome. (2人とも歓迎されない)という文を例に挙げれば、動詞の単数[複数]呼応に影響を与えるのは主語である名詞句(neither of them)の中心語(neither)なのか、名詞句の中で動詞にもっとも近い語(they)なのか、名詞句全体(neither of them)なのかというふうに、名詞句のどこに注目するかで動詞の呼応が異なることを示すことができる(詳しくは1.10を参照)。

第3に、生成文法のような理論を引用するまでもなく、このような名詞句の使用は普通に見ることができる。例えば、英米の英語辞書や英文法学習書では名詞句(noun phrase)は「名詞を中心語とする句」を指すことが多い。例えば、COD¹²では noun phrase を“a word or group of words containing a noun and functioning in a sentence as subject, object, or prepositional object”と定義する(下線は筆者)。また、COBUILD⁸では He put the bottle of wine on the kitchen table. (彼はワインボトルを台所のテーブルに置いた)という例を挙げて、この文中の He と the bottle of wine と the kitchen table を noun phrase (=noun group)としている。代名詞(he)も名詞句とみなす点は生成文法とも一致する。その他の英語辞書においても名詞を中心とする語を名詞句の例として挙げていることから、これらを名詞句の典型例とみなしていることがわかる。

このように、あいまいさをなくして説明に一貫性を与えるためにも、生

成文法などの立場は役に立つと思われる。もちろん、これによって伝統文法や日本の英文法学習書をすべて否定しようとしているわけではない。ここでの目的は、伝統文法と生成文法との文法観の違いによって、名詞句の用語上の扱いが大きく異なっていることに注意を促すことであり、特に、これ以降の説明に当たって伝統文法に基づいた誤解をしないように、本書における名詞句の見方を確認しておくことにある。この点を除けば、伝統文法で示された知見と洞察は依然として語法・文法上有益であり、今後も積極的に活用されるべき貴重な情報の宝庫であるのに変わりがないことを付け加えておく。

1.1.4 名詞句の定義

名詞句と名詞の典型的な関係をまとめると次のようになる (Huddleston and Pullum (2002: 326)に基づく)。

- (4) a. 名詞句は主語・目的語・補語になりうる。
- b. 名詞句は通例、名詞を中心とし、それに従属する要素が付く形をとる。この時の名詞を主要部(head)と呼ぶ(例: my goal の goal)。主要部名詞が単独で名詞句を作ることもある(例: *Haste makes waste.*)。
- c. 固有名詞も文中では名詞句とみなす。
- (5) a. 名詞は典型的に数や格に関して屈折変化する(例: dog – dogs(複数); child – child's(所有格))。
- b. 名詞は名詞句の主要部となる。
- c. 名詞には冠詞などの決定詞(determiner)、前置修飾の形容詞、関係詞節など、名詞に特有の従属要素がある。

1.1.5 ものを指し示すのは名詞ではなく名詞句

名詞句は文法的役割を担う単位であると同時に、指示対象の特定に関する情報を含む単位でもある。

名詞はものの名前を表すが、それによって話し手が実際にその名前を持

つものうちのどれを指すかは表さない。名詞は名詞句となることによって初めて話し手の指すものを表すことができるのである。例えば、名詞 dog は単に「犬」という概念を表すだけで、どの犬も指してはいない。これが名詞句 the dog や my dog などになることによって初めて現実世界とつながり、特定の犬を指すことになる。また、名詞 chocolate はそれ自体ではどんな形か、どれくらいの量を指しているのかはつきりしないが、名詞句 a bar of chocolate や a box of chocolates などによって表現されることによって、板チョコ 1 枚を指しているとか、一口サイズのチョコレートの詰め合わせを指しているとかが理解できる。もちろん、chocolate が単独で名詞句として発話された場合は、話し手は形のはつきりとししない、あるいは、形や大きさは問題でないチョコレート (Stir *chocolate* until smooth. / My dog can't eat *chocolate*.) を意図しているということになる。

なお、固有名詞と代名詞は、単独で指示対象が特定される語なので、文中ではそれ自体が名詞句としての資格を持つ。したがって、通例は、指示に関する情報が新たに付加されることはない³。

1.2 名詞の分類——英語話者はものをどう「みなす」のか

1.2.1 学校文法における名詞の分類と注意点

一般に、学校文法では名詞を普通名詞 (common noun: *child, idea, etc.*)、集合名詞 (collective noun: *family, furniture, etc.*)、物質名詞 (material noun: *water, chocolate, etc.*)、抽象名詞 (abstract noun: *freedom, experience, etc.*)、固有名詞 (proper noun: *John Williams, Tokyo, etc.*) の 5 つに分類する。

これは、名詞の意味内容に基づく分類であるが、あくまでも便宜的なも

³ the Bill Gates (あの有名な Bill Gates) や the old John I used to know (私がかっていた昔の John) のように固有名詞に冠詞が付く用法はあるが、これらの場合、同名の複数の人物や、同一人物に対して持つ複数の印象の存在を前提として使われているので、固有名詞というよりは普通名詞のように扱われているとみなすことができる。また、the Pacific (太平洋), the Thames (テムズ川) などとも the を付けて用いるが、これらは the を含めて 1 つの固有名詞とみなしたほうがよいだろう。

のであり、厳密な定義があるわけではない。したがって、いくつかの問題や誤解が生じる。例えば、「普通名詞(common noun)」という名称があいまいである。普通名詞は「同じ種類とみなされる人やもののそれぞれを表す名前で、単数形と複数形がある」と言われることが多い。childなどは典型的な例である。しかし、「家族」を表す family は、同じ種類とみなされるもの(共同生活をする集団の一種)のそれぞれを表す名前であり、これに基づいて「一家族」と「複数の家族」を単数形と複数形(a family/families)で区別することができるにもかかわらず、「普通名詞」ではなく、単純に集合名詞として分類されるのが通例である。

「普通名詞」の使用にはもう1つ注意すべき点がある。国語辞書、英語辞書によると、通例、普通名詞は固有名詞との対照で定義される。LDOCE⁶とCOBUILD⁸の common noun の定義を引くと次のような定義になっている。

- (6) a. in grammar, a common noun is any noun that is not the name of a particular person, place, or thing. For example, ‘book’, ‘sugar’, and ‘stuff’ are common nouns. (LDOCE⁶)
- b. A **common noun** is a noun such as ‘tree’, ‘water’, or ‘beauty’ that is not the name of one particular person or thing. Compare **proper noun**. (COBUILD⁸)

(6)の具体例中、sugar, stuff, water は物質名詞、beauty は抽象名詞で、どれも common noun (普通名詞)に含まれることになる。つまり、学習英語辞書の普通名詞は、学校文法で言う普通名詞よりも意味が広い(それぞれの名詞の間のより詳しい関係については1.2.2を参照)。

このように、分類方法に違いが生じるのは、名詞が指すものを現実世界における状態の類似性に基づいて分類するか、文法上の数概念(可算性)に基づいて分類するかという、視点の違いがあるからである。「普通名詞」という用語を使用する際には、どちらの視点によるものかを明確にしておく必要があるだろう。ただ、いずれにしても重要なのは、1つの名詞の意味・可算性は必ずしも一様ではないということである。単に名詞の語彙リストからある名詞(例えば family)を取り出して、それが普通名詞か、集合名詞か

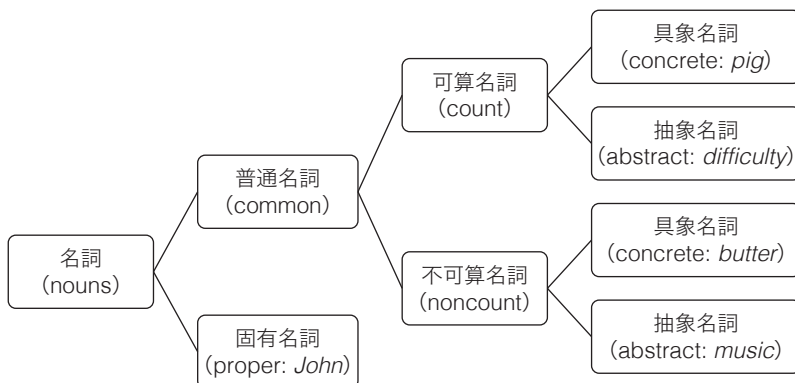
と問うのはあまり意味がない。そうではなく、その名詞が文中においてどのような意味で使われているか(例えば *My family are all well.* という文において *family* は「家族全員」を指すのか、「一世帯」を指すのか)を問うた上で、どの場合に集合名詞と言えるのかという順序で考える必要がある。

1.2.2 名詞の体系的な分類

辞書の定義に従って考えると、普通名詞は「固有名詞でない名詞」である。「固有名詞でない」とは、一般に「同類のものが複数ある」ということなので、言い換えれば、普通名詞とは「同類とされるものの個々の成員(メンバー)に、共通に付けられた名前」を表す。例えば、普通名詞 *cat* は、「それに属する個体はどれも *cat* の一例(a *cat*)となりうる、共通の性質・特徴を持つもの」を表している。つまり、*common noun* の *common* は「普通の」ではなく、むしろ「種に共通の」の意味で使われているということがわかる(OED²)。

学校文法以外では、この意味で普通名詞という用語を用いることが多い。これを踏まえて名詞を分類すると、名詞はまず普通名詞と固有名詞に大別される。これに可算(*count; countable*)・不可算(*noncount; uncountable*)という文法上の基準を加えると、名詞を体系的に分類することが可能となる。その一例を(7)に示す。

(7) 名詞の分類(Quirk et al. 1972, 1985)



具象名詞 (concrete noun) とは「observable かつ measurable」であるものを指す。(7)を名詞の5分類に当てはめて整理したのが(8)である。

(8)

	具象		抽象	
可算名詞	a	普通名詞 (pig, toy, etc.) 集合名詞の一部 (family, team, etc.)	b	抽象名詞の一部 (difficulty, remark, etc.)
不可算名詞	c	物質名詞 (butter, water, etc.) 集合名詞の一部 (baggage, furniture, etc.)	d	抽象名詞の一部 (music, homework, etc.)

(8a)と(8c)の集合名詞の違いは、(8a)が *two families* [*teams*] のように複数形になるのに対して、(8c)は複数形を持たないという点である。例えば、*baggage* (手荷物)は、*suitcase* と *bag* などといった複数の手荷物をまとめて指す語なので、日本語のように「個々の手荷物」の意味で **two baggages* (手荷物2つ)とすることはできない(「*」は「不適・誤り」であることを表す)。この点では **two butters* (バター2つ)のように言えない物質名詞と一致する。なお、上記の集合名詞の位置づけは、主に高校の英文法(伝統文法の一部)に沿って便宜的に当てはめたものである。一般の文法書では *family* などの「可算名詞+具象」のうち、単数・複数両扱いされる名詞のみを集合名詞として扱うことが多い(集合名詞の分類については大塚・中島(1982: s.v. *collective noun*)を参照)。本書での集合名詞の扱いについては1.3で解説する。(8b)の抽象名詞は *two major difficulties*, *his remarks* のように複数形が可能である点で(8d)の抽象名詞と異なる。

(8)の分類は英語の名詞を実際に文中で用いる場合に役立つ。名詞を文中で(名詞句の一部として)用いる場合は、常に単数形・複数形の区別や不定冠詞 *a(n)* の有無について判断しなくてはならないが、これに関わるのが可算・不可算の概念だからである。もちろん、固有名詞はこの概念に関わらないので可算名詞・不可算名詞と区別される。また、この分類に従えば、

実質的に普通名詞という分類概念を意識する必要がなくなると同時に、*common noun* を「普通」名詞と呼ぶべきか「共通」名詞と呼ぶべきかという問題も考慮しなくて済む。

ただし、(8)に基づいて名詞を可算・不可算の観点から区別したとしても、語彙によっては実際の使用上注意すべき点がいくつかある。1つは可算・不可算という概念自体に関わる問題であり、もう1つは単数扱い・複数扱いという数の一致(*number agreement*)に関わる問題である。これらについて、以下で詳しく見ていくことにする。

1.2.3 可算と不可算(1)——現実世界との違い

可算・不可算の区別は日本語にないものであると同時に、英語特有の区別をするという点で、日本人学習者にとっては注意が必要である。英語の可算性は英語話者の目を通して考えられた文法上の基準であり、現実世界のものに対する1つの見方を示しているにすぎないので、日本語はもちろんのこと、他言語の話者の視点に基づいて英語の可算性を判断するのは適切ではない。

例えば、「豆を食べる」は *eat beans* [peas] だが、「米を食べる」は *eat rice* である。どちらも穀物という点では同じだが、「豆」は複数形で、「米」は単数形である。さらに、*beans* [peas] は *a bean* [pea] というふうに「1粒」を表し、単数と複数で使い分けることができるが、*rice* は個としての境界を持たない(個として意味をなさない)ものとみなされるので常に *rice* である(もちろん、*a grain of rice* で「1粒」を表すことはできるが、単独では表現できない)。よって、*bean* [pea] は可算名詞、*rice* は不可算名詞という異なった扱いになる。

この違いは、個体を見分けるのに拠りどころとなる人間の視覚が影響していると言えるかもしれないが、必ずしもそうとは限らない。例えば、トウモロコシ(*corn*)の粒の大きさは *bean* とさほど変わらない程度だが、*corn* は不可算名詞である。また、単に大きさで比較するのであれば、ゴマ(*sesame seed*)は(穀物ではないが食用とする種子として豆と同類と考えて比較すると) *bean* よりもずっと小さいが、可算名詞である(ただし、*apples grown from seed*

(種から育てたリンゴ)の場合は不可算名詞)。

また、「家具」は日本語では1つ、2つと数えることができるが、英語では a piece [two pieces] of *furniture* のように、*furniture* 自体は数えられない名詞として扱う。

要するに、英語の可算・不可算の区別は、英語の話者にとって、個体として意味のあるものかどうかという観点から行われている。実際に目には見えていても、どのように「みなす」かが問題となるのである。

1.2.4 可算と不可算(2)——言語間で異なるということ

可算・不可算の区別は言語によって異なる。例えば、フランス語のような、英語と比較的關係の深い言語であっても、それぞれの語の可算・不可算の選択には違いがある。(9)は同じ意味を持つ名詞について、英語では不可算名詞が、フランス語では可算名詞が用いられる例である(左が英語、右がフランス語(複数形))。

- (9) a. furniture – meubles (家具)
 b. information – informations (情報)
 c. homework – devoirs (宿題)
 d. to do research – faire des recherches (研究を行う)

1.2.5 可算と不可算(3)——可算名詞は「数えられる」のか

可算名詞か不可算名詞かを判断する一つの方法が、one, two, three などの数詞(cardinal numeral)を付けて数えられるかどうかというものである。例えば、*idea*, *deer* は数詞を付けて数えることができるが、*information* はそれができない。

- (10) a. one [an] *idea*, two *ideas*, three *ideas*, ... (考え)
 b. one [a] *deer*, two *deer*, three *deer*, ... (鹿)
 c. *one [*an] *information*, *two *information*, ... (情報)

よって、*idea* と(単複同形の) *deer* は可算名詞、*information* は不可算名詞で

ある。この数詞の付加という条件に当てはまる名詞が典型的な可算名詞と言える。

しかし、辞書などで可算名詞とされるものの中には「数えられない」名詞も含まれる。例えば、*kindness* (親切な行為[=an act of kindness])には単数形と複数形があるにもかかわらず、数詞は付かない。

(11) *a kindness, many kindnesses, *two kindnesses*

また、通例可算名詞は単数形に不定冠詞 a(n)が付くという点で不可算名詞と区別されるが、不可算名詞にも a(n)が付くことがある。したがって、名詞に a(n)が付くからといって、それが可算名詞であるとは限らない。(12)の *understanding, knowledge, education* は不可算名詞であるが、形容詞に修飾される(意味が限定される)と、a(n)が付く(*knowledge* の場合は付かないこともある)。

(12) a. *a clear understanding* (明確な理解)

b. *a good knowledge of wildlife* (野生生物の豊富な知識)

c. *an education* [=a good education] (立派な教育)

これらは、不定冠詞が付くことによって「一定の理解[知識、教育]」といったひとまとまりの内容を暗示するので、可算名詞の性質を多少帯びていると言えるかもしれないが、数詞を付けることはできないし、複数形にすることもできないので、不可算名詞であることに変わりはない。ちなみに、この種の不可算名詞について、辞書では[singular, U], [U], [(具体例では) a(...)]などのような表記をすることが多い。

なお、抽象名詞に a(n)が付いた場合、“a(n) = some” と解釈されることもあるが、(12)についてその解釈が当てはまるかは疑問である。ちなみに、(12a)は、コーパス(COCA)で“some [any] clear understanding”を検索してもその使用例は出てこない⁴。また、(12b)の *knowledge* については、「しばしば、ひと通りの体系的知識を暗示する」(『ウィズダム英和辞典』[第3版])

⁴ COCA = The Corpus of Contemporary American English (<http://corpus.byu.edu/coca/>)

という指摘がある。(12c)については、「ひと通りの教育を表しているのであって、断片的な印象を含む some とは異なる」と判断する話者もいるので、少なくとも、“a(n) = some” の解釈が常に当てはまるわけではないようである。

抽象名詞に不定冠詞 a(n)が付く例は様々だが、基本的に、a(n)が付く場合は、それが無い場合と比べて具体性が高い、あるいは、限定的というのが共通の特徴である。これと個々の語の特徴が関連して a(n)が付くかどうかが決まるようである。一例として、interest (興味)の場合はどうなるのか、COCA の検索結果をもとにまとめてみる。

まず、interest が動詞 HAVE (=have/has/had) または TAKE (=take/takes/took/taken) の目的語となって、HAVE/TAKE (an) interest の形をとる場合、不定冠詞のある HAVE/TAKE an interest のほうが、不定冠詞のない HAVE/TAKE interest よりも多く使われる(前者が1,244件、後者が173件)。これは、この表現が「特定のものに対する興味がある」ことを示すために具体化しやすく、その結果、an interest の形をとるものと思われる。もちろん、興味の対象について抱く漠然とした興味(「もっと知りたい」という感情)だけを表すのであれば、無冠詞の HAVE/TAKE interest を使う余地が残されている。また、HAVE/TAKE an interest は in 句を伴うことが多いのも特徴的である。つまり、興味の対象を特定する in 句の存在も interest の具体性を高める要因となっている。

さらに、interest は、先にも話題になった形容詞の修飾によって意味が限定され、「ある種の興味」へと種別化されることで、具体性が高まるようである。例えば、TAKE an interest という表現の場合、これに形容詞の付いた TAKE a(n) + 形容詞 + interest (e.g. take a keen interest) と比較すると、形容詞の付いた例のほうが、付かない例より約6倍多い(330件)。言い換えれば、interest は形容詞が付くと具体性が高まり、不定冠詞 a(n) を伴う傾向が強まるということになる。なお、ここでも in 句を伴う例が多くを占める(例えば She does take a keen interest in their progress.)。

interest に後続する in 句が具体性を高めるもう1つの根拠は以下のような文からも推測することができる。